

待降節第2主日 説教 「呼び求めよ、主は近くにいます」 要旨  
牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2022年12月4日

イザヤ書 55 : 1-11

アドヴェントクランツの2本のローソクに火が灯されました。このように、一本、そして、一本と、クランツに火が灯されるの目の当たりにし、私たちはクリスマスが近づいていることを知らされるのです。ところで、クリスマスに向かって時を刻むアドヴェントクランツを見て、皆さんは何を思うのでしょうか。ローソクに火が灯されるのは一週間に一度のことです。早く早くとはやし立て、すべてのローソクに火を灯したところで、一気にクリスマスがやってくるわけではありません。つまり、すぐにはやってこないもの、それがクリスマスというものでもあるのです。しかし、それでも確実に訪れる、それが私たちが心待ちにしているクリスマスでもあります。では、そこで私たちが大切にしていることは何なのでしょう。「確実に」ということなのでしょう。それとも「遅々として進まない」ということなのでしょう。

「確実に」ということは「必ず」ということでもあります。私たちがクリスマスを安心して待つことができるのはそのためです。だから、「確実に」ということが分かっているのは非常にありがたいことです。なぜなら、もし来るのか来ないのかも分からなければ、待つ気にもなれませんし、また、それでも、というところで待つてはみても、結果が伴わなければ、「待つんじゃなかった」ということにもなりかねないからです。しかし、来るのは分かっている、今すぐということではありません。ですから、しばらくはやっては来ないというのは、非常にじれったいし、待っているうちにすっかり忘れてしまうということもあるでしょう。ですから、そういう面倒なものとはできるなら関わりたくはないと思う人がいたとしても不思議ではありません。そして、時として、私たちも「どちらか」はつきりして欲しいと思うのはそのためです。ただ、「どちらか」ということではなく、「どちらも」大事にしてきた

のが私たちのアドヴェントの時間の過ごし方でもありました。それは、時間という、この、私たちの決して思い通りにはいないものの中に確実に働く神様の御心を知らされるのがアドヴェントでもあるからです。

そして、私たちがこの神様の御心を感じるのはアドヴェントを過ごすこの時だけではありません。私たちそれぞれに与えられている時間は必ずしも同じではありませんが、けれども、生涯というその与えられた時間のすべてを通して明らかにされるのが神様の御心でもあるからです。ですから、私たちの生涯とは、この神様の御心によって導かれているのであり、そういう意味、神様の物語を生きているのがこの場にある私たち一人一人でもあるのです。そして、この、神様から与えられた時間を生きるということは、神様の恵みを受け、日々、生きている、生かされているということでもあります。それゆえ、この、私たちが日々受けている恵みは私たちの暮らしを支えることとなります。ですから、神様の物語に生きる私たちの暮らしは、ギスギスした、刺々しいものとなることはありません。寒々しく、よそよそしいものではなく、命に潤いを与える瑞々しいものでもあるのです。イザヤ書の1節から3節に記されていることは、神様の物語に生きる私たちの、そういう瑞々しい暮らしぶりが示されているように思いますが、そして、そこで神様が「あなたたちの魂はその豊かさを楽しむであろう」と仰っているように、その暮らしを楽しむ喜ぶことができるのが神様の物語に生きる私たちでもあるのです。それは、私たちの命、その生涯というものが神様の慈しみとその憐れみに、つまり、神様の愛の下に置かれているからです。

そこで、個人的なことを申し上げるのをお許し頂きたいのですが、私が洗礼へと導かれたのは、牧師という立場から申し上げるなら、それは、今申しましたように、私自身が神様の愛の下にあることを知らされ

たからです。しかし、当然のことではありませんが、当時の私にはそのような言葉など持ち合わせてはおりませんでした。それまでの私の人生において、最も縁遠いと思っていたのがキリスト教信仰であったからです。けれども、自然なこととして信仰を受け入れていったのは、信仰に生きることの喜びを素直に現す人々と共に過ごすことが許されたからです。つまり、信仰の豊かさを共に楽しみ、共に分かち合うことが許された、肩肘張らずに信仰へと導かれていったのはそれゆえのことでもありました。従って、この分かち合いには、気取ったところは何一つありませんでした。だから、クリスチャンとして、その喜びに生きるその人達の暮らしぶりそのものに触れ、気がつけば教会に通うようになっていたということです。

そして、その中で特に印象深く記憶に残っているものはそのクリスマスを迎え方です。それは、私自身の貧しいキリスト教理解ゆえのことでもありますが、それまでクリスマスと言えば、わいわい騒ぐくらいのもんと思っただけではなかったからです。ですから、クリスマスが待つことに意味があるなどとは全く知るよしもありませんでした。そして、この、クリスマスが待つことに意味があると知らされたのは、友人の自宅に招かれ、友人の母親がクリスマスの訪れ、到来の楽しさとその喜びを、子どもの頃の思い出を交えながら語ってくれたからです。そして、その中で特に印象深く心に残っていることは、クリスマスの祝い方が必ずしもいつも同じではないということでした。それは、同じように出来ないこともありますし、その反対にいつも以上に盛大に祝えることもあるからです。ただ、それが私の心に残っているのは、その母親がそうした中で一つだけいつも同じことがあると言ったことです。それがクリスマスを待ち望むということですが、印象深かったのは、いろいろなことを考えながら、その日を、その時を待ち望んでいるというこの一言でありました。

今年は誰を招こう、誰とクリスマスを祝おう、そのためにどんな準備をしよう、ク

リスマスに備え、いろいろな話をしながら待ち望むのだそうです。私はその場に招かれたわけですが、ですから、招かれたその場は、家族という限られた、閉ざされた関係性の中ではありませんでした。恵みは多くの人と分かち合うものである、友人の家族の物事の捉え方の中心にあったのは、礼拝から礼拝へと招かれ、導かれるその暮らしを通して身につけたことであり、それゆえ、そこには神様の物語に生きることの豊かさ、麗しさ、美しさ、何よりもその楽しさ、そういう彼らの生活に根ざした信仰というものに私も触れ、神様を信じ生きることの喜びの一端を経験として知らされたのです。そして、そこで大切なことは精一杯ということでもありますが、それは、多くの人々とクリスマスの喜びを一緒に分かち合いたい、精一杯のもてなしで多くの人たちを招き、一緒に祝いたい、この喜びを分かち合いたい、彼らを通して感じたことはそういうことでもありました。そして、この精一杯ということですが、それは、無理に無理を重ねて、ということではありません。私たちの普段の暮らしの延長線上にあるものであり、ですから、それは少しだけ、ほんの少しだけ背伸びをすることだと思うのです。そして、このほんの少しだけ、ということが大事なんだとその時私が教えられたのは、それが彼らの普段の暮らしぶりを知り、そこから出て来たことを知っていたからです。もし普段の暮らしぶりからあまりにかけ離れたものであるなら、私も落ち着いてその場にいることなど到底出来なかったと思います。

それが仮に夢のような時間であったとしたら、事実、その年のクリスマスはそれまで感じたこともないものでもありましたが、けれども、自分からあまりにかけ離れた夢のようなものであったなら、夢から覚め、現実に引き戻された時、返ってその時間は空しい、残酷なものでしかないからです。しかし、そうではなかった、それは、その特別な時が友人の家族にとっては普段の暮らしの延長線上にあるものであり、そして、普通であれば、その豊かな時間はうたかたの夢のように、その場限りで

終わってしまうものではないからです。ですから、物の数にも数えられないはずの私が経験したことは、はっきりと、物の数に入っているということです。3節に「私はあなたたちととこしえの契約を結ぶ。ダビデの約束した真実の慈しみゆえに」とあることがそのことを教えてくれているのですが、それは、そこで言われているダビデとの約束というものがダビデという特別な個人に限って言われているものではないからです。「あなたたち」と言われているように、この約束はあなたたち、つまり、神様の御前に集う私たち、神様の祝福された私たち、さらに言えば、「極めて良かった」と言われているのが神様に造られた私たち人間すべてに当てはまることです。このように神様の真実とその慈しみの下に置かれているのが私たち人間なのであり、従って、拙いその経験を通して4節以下の御言葉を見ていくなら、そこで語られていることは真実であると私はそう思います。

では、そこで語られている「彼」とは誰なのでしょう。私にとっては私を誘ってくれた友人ということにもなるのですが、けれども、影響を与えたという点では、友人よりもその母親の方がより大きかったわけですから、彼女というのが正しいようにも思うのですが、けれども、そこでもし私が彼とは、あなたですと、その友人の母親に向かって語ったとしたら、その母親は間違いなくこう言ったでしょう。「違います、彼とは、イエス様、このお方なのです」と、間違いなくそう私に語ってくれたと思うのです。だから、5節で語られていることは私個人に限ったことではなく、この場にある私たちすべてに同じことが言えるのです。なぜなら、私の友人やその母親だけでなく、私たちすべてがイエス様を通して神様を知ったからです。ですから、そういう意味で記憶を共有することは私たちの信仰においてはとても大切なことでもあるのですが、それは、神様の物語を生きるは、記憶と経験の共有こそが最も大事なことでもあるからです。従って、クリスマスの訪れを待つということは、私たち一人一人にその共有、分かち合いが促

されるということでもありますが、ただ、待つことの中で私たちが経験することは、先ほど個人的なことをお話ししましたが、そうした夢のような世界だけではありません。6節、7節では、二度「立ち帰る」ということが語られているのですが、主の御許に身を寄せること、あるいは、主へと立ち帰ることを強く要求されるということは、私たちが神様を見失うか、あるいは、離れるか、いずれにせよ、神などいないという経験をすることがあるからです。そして、今、待つことの中で私たちはそのことを経験させられているのです。

お伝えしましたように、先週、一人の兄弟が主の御許に召されることとなりました。そして、昨夜のことです。神様は一人の姉妹を突然その御許へとお召しになったのです。昨夜はその対応に追われていたのですが、ご家族とはまだお会いしておりませんので、詳細については何も分かってはおりません。詳しくはお訪ねした際に伺うことになっておりますが、ただ、私たちのこの今の悲しみは、私たちが主を待ち望む中で経験させられていることでもあるのです。ですから、8節に「私の思いは、あなたたちの思いとは異なり、私の道はあなたたちの道と異なる」と主が仰っておられることは事実その通りであると思います。それは、待つことの中で私たちに知らされていることは、神様と私たちとは交わらない、交わることもない、そういうことでもあるからです。まただからなのでしょう。私たちが神様と交わること、気持ちが通じ合い、重なり合うことを求めてしまうのは。そして、まさに、この求めてしまう、求めたくなってしまうところに現されているものが、御言葉が語る私たちの道でもあるのです。

イスラエルは神様に背き、神様から離れ、その罪の結果として遠い異国であるバビロンに捕囚の民として連れて行かれ、こうしてイスラエルという国は地上から姿を消すことになったのです。そこで御言葉が私たちに教えてくれていることは、それもまた神様の御心ゆえのものであったということです。つまり、バビロン捕囚は神様の

仕打ち、仕業であったということなのですが、それゆえ、先ほどの8節の言葉は、神様と人が交わることのない現実を物語っているとも言えるのでしょうか。ただ、御言葉はどうしてこの不都合な事実をイエス・キリストの到来を希望をもって待ち望む私たちに語るのでしょうか。この時、私たちが待ち望んでいることは神様と私たちとが交わることです。見放されてはいないし、見捨てられてもいない、主を待ち望む中で私たちが望むことは、この神様の御心が現され、つながっているということです。ところが、今の私たちはそうではない、そのご家族と共に愛する者との別れを、この悲しみと苦しみを共有しているのが私たちでもあるからです。このように、御言葉を通して、私たちは、イスラエルの人々が経験したことを同じように経験してもいるわけですが、このことはつまり、待つことの中で様々な軛を負っているのがこうして御言葉に聞き、神様の物語に生きる私たちであるということです。ところが、その私たちに向かって御言葉はこう語るのです。

「私の口から出る私の言葉も空しくは、私の元に戻らない。それは私の望むことを成し遂げ、私が与えた使命を必ず果たす」と御言葉は私たちに語るのですが、神様の望み、御言葉に与えられたその使命とは何なのでしょう。それが私たちを悲しませ、苦しませるものであれば、その使命を立派に果たしたと言えるのでしょうか。けれども、そのことを願う者は私たちの中に誰一人としておりません。それどころか、そのような神様の御心に寄り添いたいとも思いませんし、また聞かなければならないとも思えないのです。けれども、その中でなお、神様に向かつて、なぜと問い、神様の御心を尋ね求めたのが捕囚の民、イスラエルの人々でありました。そして、捕囚から数えて五十年後、イスラエルは解放され、再び祖国に戻ることになったのですが、ではそこで知った神様の望み、その使命とは一体何だったのでしょうか。それは、神様は決して私たちのことを見放さず、見捨てないということでもあります。待つことの中で私たちに知らされていることはこの

ことです。ですから、私たちが今心に留めるべきはこのことです。この希望の許に置かれている私たちであること、ここに私たちは目を向けなければならないのです。

神の子であるイエス・キリストが人の姿をもってこの世に生まれたということは、神の子が人という軛を負ったということです。従って、御子の誕生は、私たちのものの見方からすれば、御子がバビロン捕囚のような経験をしたということです。けれども、その御子が私たちと歩みを共にするからこそ、そこで私たちは神様との交わりに生きることが許されるのです。ですから、待つことの中で私たちに知らされていることは、神様との交わりの断絶ではありません。その交わりの回復であり、その絆の強さです。私は決して見放さないし、見捨てないという、神様のこの強い意志、願い、その思いであり、御子の誕生を待ち望む中で私たちに知らされることはこの神様の御心なのです。そして、このことは、今私たちがはじめて経験させられていることではありません。私たちはこれまで何度このような経験を分かち合ってきたのでしょうか。今この時の私たちの悲しみと苦しみを、御子と共にこれまで分かち合ってきたのがこうしてこの場にある私たちであるのです。ただ、そうだとしても、すぐに神様の御心のすべてが私たちに明らかにされるわけではありません。けれども、御心は必ず明らかにされるのです。待つことの中で私たちが繰り返し知らされていることは、確実に、そして、必ず、ということなのです。まただから、私たちは、その祝い方は常に同じではなくとも、待つことの中で私たちのために御子をお遣わしになられた神様の御心を知るのです。ですから、そのためにも、私たちは今目の前に置かれたものがその目にいかに映ろうとも、目をそらさずにしっかりと見つめ、すべてのものを分かち合いながら、アドヴェントを過ごしたいと思うのです。なぜなら、御子の誕生という祝いの席はその先に備えられているものでもあるからです。祈りましょう。